

～理想郷『新しき村』の精神を継承して～

『新しき村』の理事長の寺島洋さんは、武者小路実篤氏の「仲良き事は美しき哉」や「自分を生かし、他人を尊重することに力点を置き、そのために全ての人々が人間らしい生活ができ、全ての人々が幸福に生きられる社会をめざす」この言葉に心をひかれ、『新しき村』に二十歳頃に入りました。今日まで永きにわたり、新しき村の精神を継承しています。現在、村には9人の人が共同生活しており今でもその精神は引き継がれています。『新しき村』は労働とその対価を誰もが公平に受け、村民全員が幸福に生きられる社会、「自分も生き、他人も生きる、自他共生」を目指しているという理事長の寺島さん。来年には、創設100周年を迎える『新しき村』ですが、その精神を村民の皆さんと一緒に今後も引き継いで行きたいと伝えています。



【新しき村美術館】

開館時間：午前10時～正午・午後2時～午後5時
 ※休館日：毎週月曜日及び12月26日～1月4日
 『新しき村』の美術館には、武者小路実篤氏の「書」や「絵」、また当時の実篤氏の様々な写真、村の風景や様子などの写真が多数展示されていますので、ぜひご鑑賞ください。



文豪がめざした理想郷を訪れると『この道より我を生かす道なしこの道を歩く』、武者小路実篤氏の言葉が出迎えてくれます。どことなく心が休まるこの地は、武者小路実篤氏が、人間の理想郷を提唱して築いた、毛呂山町大字葛貫地内の『新しき村』です。『新しき村』は、大正7年九州の宮崎県木城村（現・木城町）に建設、しかし、昭和13年、ダムの建設が本格化したことで村は移転を余儀なくされ、村民たちは、自然と緑豊かな毛呂山町を新天地とし、翌年新たに『新しき村』をこの地に築きます。その後村民たちは、武者小路実篤氏が提唱した理想郷の精神を継承し、村では「自他共生」という言葉に象徴される”新しき村の精神”が今も受け継がれています。来年100周年を迎える『新しき村』を数回に分けて紹介していきます。



「この道より
我を生かす道なし
この道を歩く」

修復された 都電 7022 号



『新しき村』には、昭和29年頃に製造された「都電」があります。これは、交通事情の変動で昭和43年に廃車となったもので、女性会員から寄贈されたものです。この都電は、新しき村「仲良し幼稚園」の園舎の補助として使用されており、当時の園児の学習と遊戯の場となつて親しまれていました。昭和59年の幼稚園閉園後も、近くの子どもの遊戯の場として活躍していたものです。そうした中で、『新しき村』が来年に創立100周年を迎えるにあたり、今年の6月に『新しき村創立100周年記念行事、都電7022号修復プロジェクト』によって、多くの関係者のご協力により、見事に蘇りました。

都電 7022号

「この道より 我を生かす道なしこの道を歩く」
 ・「仲良き事は美しき哉」
 ・「山と山が讃嘆しあうように 星と星が讃嘆しあうように 人間と人間とが讃嘆しあいたいものだ」
 などがあります。
 「人間らしく生きる」、「自己を生かす」など、人間の理想郷を提唱した人物でありました。
 代表的な言葉は、
 ・「この道より 我を生かす道なしこの道を歩く」
 ・「仲良き事は美しき哉」
 ・「山と山が讃嘆しあうように 星と星が讃嘆しあうように 人間と人間とが讃嘆しあいたいものだ」
 志賀直哉氏、有島武郎氏らとともに文学雑誌『白樺』を創刊し、小説をはじめ人生論や芸術論などを精神的に発表し、白樺派の精神的な支柱として活躍しました。人道主義・理想主義・個人尊重を訴えた白樺派を代表する文豪でした。実篤氏は『新しき村』は、労働とその対価を公平に受け、全ての人々が幸福に生きられる社会を目指した村で、村の理想は社会主義ではなく、むしろ共生主義・生命主義だったと語っていました。

武者小路実篤 (1885～1976年)



武者小路実篤自画像